

学生が作る／学生と作る実践的教養教育

【取組概要】

文学部では「自分たちで学びをかたちに」をキーワードに、新たな演習授業「実践的教養演習」を開始しました。

ICT 技術の進化やグローバル化により社会が大きく変容する中、領域を超えて協働する能力や独創的な発想を具体化できる行動力がますます重要になっています。こうした能力をもった学生を育てるためには、相応の舞台が必要です。「実践的教養演習」は教育内容も、教室環境も進化させた、文学部の新たな学びの舞台です。

「実践的教養演習」は、学生が設定された共通テーマについて、教科書出版を目指す出版部門、学術イベントを企画・実施するイベント部門、動画による表現を追求する動画制作部門の三つに分かれて学び、それぞれの表現方法で成果をまとめることを目標としています。アクティブ・ラーニングの手法を組み合わせた本授業は、少人数のグループで同一テーマに複数の観点からアプローチした成果物を創造することで、専門領域を超えたコミュニケーション能力やクリエイティブ・スキルを育みます。

2020 年度は、「ヒトとモノ」という共通テーマのもと、出版、イベント、動画制作の各部門で教員 2 名ずつが担当します。加えて、部門ごとにプロの編集者、脚本家、映画監督、文化資源調査の専門家などの話もうかがいながら、必要な技術とものの見方を身につけていきます。

参考：[「実践的教養演習」はこちら](#)

授業の特色

1. 領域横断的な学び

13 専攻を擁する文学部の異なる専門領域を学ぶ学生が集まることで、同じテーマをさまざまな角度から検討でき、刺激的な議論が展開されます。文学部の学生だけでなく、他学部の学生も履修しています。

2. 主体的・対話的な学び

受講者は少人数のグループに分かれて課題に取り組みます。1 年次から 4 年次まで経験値の異なる学生と一緒に学ぶことで、ときには教え、ときには教えられることで、ピアラーニングによる学習効果をもたらします。互いの意見の良いところを取り入れながら優れた成果を出す協働性、一つの目標に向かってものごとを作り上げていく協調性を伸ばすチャンスを提供します。

3. 実践的な学び

出版、イベント、動画という三つの異なった表現手法を用いて、実践的な学びに取り組みます。一つのテーマをそれぞれの角度から捉え、理解したことを教科書出版、学術イベントの企画・実施、動画発信という形でまとめ上げます。多様な学びを通して、さらに一歩進んだ実践的技術を身につけることができます。

【取組実績】

本取組は、文学部を中心に全学的な「領域横断的学び」を展開し、さらにそれを抽象的な目標に終わらせず、学内インターンシップともいえる制作の過程を経て、具体的な成果物に結びつけることに特徴があります。その結果、次のような実績と成果を示すことができます。

1. 出版物

2020 年度は「ヒトとモノ」という統一テーマに基づき、『読書する知性 「本づくり」 演習成果』（中央大学出版部 定価 1000 円・税別）を刊行しました。

<https://up.r.chuo-u.ac.jp/up/isbn/ISBN978-4-8057-5232-6.html>

2021 年度は「時間 記憶 記録」という統一テーマに基づき、『学びの扉をひらく一時間・記憶・記録一』上下巻（中央大学出版部 各 1000 円・税別）を刊行しました。

<https://up.r.chuo-u.ac.jp/up/isbn/ISBN978-4-8057-5233-3.html>

年度により刊行に向けての手順と内容は異なりましたが、統一テーマを踏まえての本のコンセプトの具体化、執筆者の選定と依頼、タイトル・見出しやコピーづくり、戻ってきた原稿の読み込み・校閲と修正依頼、学生コラムの執筆、装丁の案作りなど、著作権や編集技法、キャッチコピーなどについて専門家の講演などを聴きながらの刊行となりました。受講生からは、「出版企画を練っていく作業、原稿を依頼して実際に頂けた時の喜び、そして1冊の本を作り上げていく過程を体験できる貴重な体験ができた」「本との向き合い方を見直すきっかけになった」など「モノづくり」の大変さと面白さを学んでももらえました。刊行した本は、授業での教科書のほか、高校生や新入生への「文学部の学び入門」として活用しています。

2. 制作物・イベント

2020 年度は統一テーマ「ヒトとモノ」に基づき、「中央大学を知ろう！ 中大 135 年の歴史を歩く」と題して駿河台キャンパスから移したもののや卒業生との繋がりを示すモノなど、中央大学多摩キャンパス内の文化資源マップを作成し、学内やオープンキャンパスなどで配付しました。

[このマップは、本学ウェブサイトにはアップロードされており、今でも多摩キャンパス来訪者や地域住民の方などに利用されています。](#)

2021 年度は統一テーマ「時間・記憶・記録」に基づき、「THE MUSIC DAY 音楽と記憶と癒やし」と題するイベントをおこないました（右図参照）。

コロナ禍で暗い気持ちになりがちな日々を過ごす中で、イベントを通じて参加した人たちが明るくなれるようにとの趣旨で企画しました。イベントは2部構成で、第1部は、四季それぞれに関連した J-pop や童謡などを聞いて、自分の中の記憶を思い出してもらいそれを他の参加者と共有するワークショッ



プ。第2部は、文学部の兼任教員で音楽演奏家、ヴァイオリニストの勝村麻由子先生と、ピアニストの村田千佳さんによる生演奏。また第1部、第2部の内容をそれぞれ回想的音楽療法、聴取型音楽療法という位置づけにして、音楽療法を体感してもらうイベントでした。

終了後のアンケートでは、生演奏が良かった、音楽療法について理解が深まった、記憶の共有が新たな視点の発見につながったなど、すべての回答者から参加してよかったとの感想が得られました。

3. 動画

年度ごとに、統一テーマに基づく動画制作に取り組み、それぞれ You Tube 上に公開しました。2020 年度は中央大学文学部を紹介する動画、2021 年度は実践的教養演習を紹介する動画になっており、高校生や新入生対象のイベント等で活用しています。

2020 年度

<https://www.youtube.com/watch?v=xVmi6TR5ELc&t=1s>

2021 年度

<https://www.youtube.com/watch?v=S1qW6U3nEMA&t=51s>

4. 学生の満足度

授業後の学生アンケートで学生の科目満足度を調査しました。取組終了年度の 2021 年度には、「新しい知見」「主体性」「多様な観点」「自身の目標達成」「将来・学びへの有用性」といった項目の調査をおこない、いずれも高い評価を得ました。特に「新しい知見」「将来・学びへの有用性」の項目については、履修者全員が 5 段階評価の 4 以上の回答をしていました。このことから、この科目が他の科目にはない独自の意義を持っていたことがわかります。

5. 教員の FD 活動

この科目は、「領域横断的な学び」「理念と実践の融合」といった目標を掲げ、専門分野を超えた複数の教員で担当したことから、履修した学生たちにとってだけでなく、担当教員にとっての FD 活動としての意味も大きかったといえます。実際に、担当教員へのアンケートでは、次のような肯定的な回答が多く寄せられました。

「基盤的ゆえに汎用性のある知のあり方（教養）を実践できる場であったように感じている。」「学部間・専攻間・学問間の壁を低くできたのではないか。」「自分自身の授業を工夫するヒントをもらえたと思う。」「多様な学問知に触れることができた。」「各専門分野の知識や、それぞれの先生方の知識・知見が伺える貴重な機会だった。」「複数の教員が関わることで学生指導・教育の暗黙知を共有できた。」

6. 学内・学外における反響

ここまで示したような独自の趣旨と内容を備えた取組であったため、その授業科目については、多くのメディア取材がありました。

学内では『HAKUMON Chuo』（2021 秋冬号）の「読書する知性『本づくり』演習成果」出版紹介の記事（5 ページ参照）、『HAKUMON Chuo』（2022 年 4 月号）の本授業特集記事、『草のみどり』（2020 年 7 月号）文学部特集での学生の寄稿（7 ページ参照）などです。いずれも多くのページを割いて紹介され、多くの学生、教職員、父母に本取組の特色を知ってもらうことができました。

さらに学外では、『読売新聞』が「キャンパス探訪 中央大学／モノ創る文学部」（2021 年 7 月 6 日付朝刊）として、全国紙面で本取組を写真入りで紹介してくれました。

7. 今後に向けて

教育力向上推進事業による支援期間は 2021 年度をもって終了となりましたが、その教育効果の高さに鑑みて、「実践的教養演習」は引き続き開講することとなりました。

2022 年度は出版部門と映像制作部門に分かれ、「環境と人間」という共通テーマについて理解したことを論文やレポートとは違うかたちで表現する取組をおこないます。出版部門では、「環境と人間」というテーマについて様々な角度から論じる論稿を集め、テーマ講義のデジタル教科書を作ります。映像制作部門では「環境と人間」というテーマについて考える映像や、この授業の学びについてアピールする映像を作成し発信します。

今後も、文学部における領域横断的な学び、主体的・対話的な学び、実践的な学びがより一層促進されることが期待されています。

以上

「実践的教養演習」の1年目の成果

「自分たちで学びをカタチに」をキーワードに、2020年度から文学部で始まった授業「特別教養・実践的教養演習」。

初年度は「ヒトとモノ」を共通テーマに学生たちが少人数の3部門に分かれ、

「大学の授業で使う教科書の出版」「文化資源を紹介するキャンパスマップ制作」「文学部の魅力を動画で発信」

という3つの課題に取り組みました。学生自身がテーマの検討、コンセプトを決定し、

その道のプロである外部講師のレクチャーも糧としながら創り上げた3つの成果をここにご報告いたします。

実践的教養演習



専攻の枠を越えて履修！
「領域横断」「主体的対話」
「実践と創造」で
学びをカタチにしました！



01

出版部門

大学の授業で使う教科書をつくる

「ヒトとモノ」という共通テーマを咀嚼し、「ヒトとホン」を部門のテーマとしたうえで、大学の初年次、および中央大学進学をめざす高校生を対象にして出版する教科書の企画・編集に取り組みました。ゲストスピーカーにお招きしたのはプロの編集者・コピーライター。実際の作業に即した指導を受け、学生は初歩から本作りを学びました。そして、企画立案、本学教員・兼任教員への原稿依頼を経て、寄稿された原稿の編集作業や執筆者の座談会を開催。無事、中央大学出版部への入稿を終えました。本書籍は9月に刊行予定です。



Publishing

「20歳前後に読んだ一冊」「成果物」の教科書に論稿をまとめる

ほそき ゆうすけ
細木 勇佑

法学部政治学科3年／私立日本大学藤沢高等学校（神奈川県）出身

「本を作り、実際に出版することができる」という、本好きにとってまたとない機会に導かれ、他学部履修制度を利用してこの授業に参加しました。テーマは読書体験についての論稿を集めた「20歳前後に読んだ1冊」。執筆者の選定と原稿依頼の手続きには苦労しましたが、後期の授業ではプロの編集者やコピーライターの方の話を詳しく伺うことができ、本作りの面白さを知るとともにこの授業のぜいたくさを実感しました。「この授業には、授業の枠組みを超えて熱中できる何かがある」、私はそう考えています。



02

イベント部門

文化資源を紹介するキャンパスマップ制作

ヒトを介したモノの来歴を知ることをテーマに学内の文化資源を調査し、キャンパスマップを作成しました。文化資源調査を専門とする日本史学専攻の教員をはじめ、学内広報誌のデザインに大きく関与された広島大学の教員やイベントプロデューサーをゲストスピーカーに招き、文化財調査や保護の重要性、モノを魅力的に見せるデザインやプロデュースの方法などを学び、それを生かして作業しました。成果報告会ではオンラインで中継を結び、取り上げた学内文化財がある場所でそれを紹介するという斬新な企画も盛り込みました。

学部を超えて履修。新たな気付きを得る

うちだ ひょう
内田 彪 国際経営学部国際経営学科3年／私立東洋高等学校（東京都）出身

他学部の授業を通して多角的な視点と柔軟な思考を身につけたいと考え、国際経営学部から参加しました。何かを企画立案する際は、一般的にはターゲット設定から行うのが基本ですが、それが思考法や方法論の選択を狭めることもあるのでは、と考えさせられました。異なる考えを持つ人との授業は非常に有意義でした。また、実際のマップ制作においては、調査でわかった内容をいかに紙面に反映させるかという「情報の精査」と「要約力」の重要性を痛感しました。今後はこのスキルも伸ばしていきたいです。



Event

03

映像制作部門

文学部の魅力を動画で発信

映像というモノを通してヒトに伝える意義や魅力を考えながら、前期はリモートでしたがグループで身近な素材を用いて動画の作成に取り組みました。後期は“文学部の魅力”を伝える動画の作成に取りかかりました。映画監督、脚本家、テレビ局のディレクターをゲストスピーカーに招き、映像を撮る際に心がけるべきこと、映像のストーリーをいかに創り上げるかということ、編集をどのようにするかといったことを具体的に学び、意識を高めて映像制作に臨みました。完成した動画はウィットに富んだ仕上がりとなり、大学説明会でも活用していく予定です。

映像編集技術や課題解決力を養う

ささき あいか
佐々木 愛夏

文学部人文社会学科フランス語文学文化専攻3年／群馬県立太田女子高等学校出身

広告業界に興味があり、制作側を体験してみたいと思い、映像部門を志望しました。演習が始まる際、私たちが最初に決めたのは「この制作を通して全員がスキルアップすること」。メンバーの中には、広告研究会などに所属していて、すでに編集技術を持っている人がいたので、みんなで教わりながら制作を進めました。役割分担やどう進めるかといった相談もこまめに行ったため、計画性や課題解決力も養われました。この経験をもとに、将来は人の心を動かすような広告人になりたいと思っています。



Movie

イベント部門と映像制作部門の成果物は下記サイトでご覧いただけます。

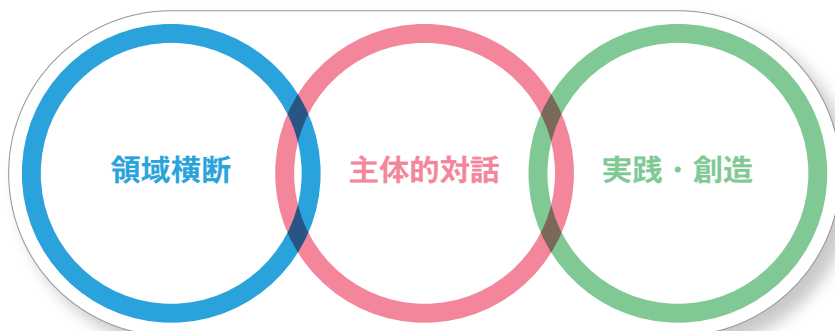
<https://www.chuo-u.ac.jp/academics/faculties/letters/characteristic/subject08/>



実践的教養演習

自分たちで学びをカタチに！
今年度から始まった新しい授業

実践的教養演習



①教科書を作る・②学術イベントを企画する・③動画で発信する



先生から教わったことに基づいた学習、という高校までの授業のイメージを覆すのが「実践的教養演習」です。大学での学びは、座学で学んだ基礎知識を元に、それぞれの専門分野で自ら問題を発見し、独自の答えを導くものです。また、参加型のいわゆるアクティブラーニングの比重も高まり、自発的な参加によりさまざまなアウトプットの手法を修得することができます。

今年度から始まった「実践的教養演習」は、前述したような従来のアクティブラーニングをさらに一歩進め、少人数のグループで同一の成果物を創造

1 専門の枠を越えて履修できる アクティブ・ラーニング

すること、専門領域を超えたコミュニケーション能力やクリエイティブ・スキルを身につけます。また、一年間の学びを通じて得た多彩な経験と自信は、将来の就職にもつながることが期待できます。

2 実践的教養演習の3つの柱

■領域横断したい人へ

文学部の学生はもちろん、他学部 of 学生も履修が可能です。実際に今年度は法学部、経済学部、商学部、総合政策学部、国際経営学部の学生が履修中。異なる専門領域を学ぶ学生が集まることで同じテーマをさまざまな角度から見ることができ、刺激的な議論が展開されています。

■実践し創造したい人へ

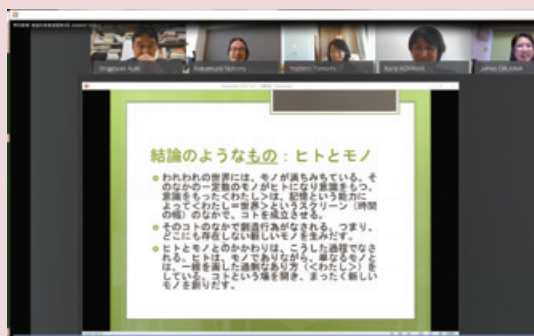
参加者は少人数のグループに分かれて課題に取り組みます。1年次から4年次まで経験値の異なる学生が一緒に学ぶため、主体的に参加すればするほど、思考力や表現力が鍛えられます。互いの意見の良いところを取り入れながら優れた成果を出す協働性を伸ばすチャンスでもあります。

「実践的教養演習」では、出版部門、イベント部門、動画制作部門の三つに分かれて協働作業に取り組みます。テーマについて学び、理解したことを教科書出版、学術イベントの企画、動画発信という形でまとめ上げます。多様な学びを通して、さらに一歩進んだ実践的技術を身につけることができる授業なのです。

FOCUS!

オンライン授業でも活発に議論しながら3つの部門での活動がスタート

今年度は「ヒトとモノ」という共通テーマのもと、多摩キャンパスの6つの学部から履修した学生が学んでいます。新型コロナウイルス感染症拡大防止対策としてリアルタイムのオンライン授業を進めています。出版、イベント、動画制作の各部門を教員2名が担当するほか、ゲストスピーカーとしてプロの編集者、脚本家、映画監督、文化資源調査の専門家などを招いてお話を伺いながら、必要な技術とものの見方を身につけていきます。限られた環境のなかで、いかに協力して目的を達成するか、今まさに学生が知恵を絞り、全力で取り組んでいます。



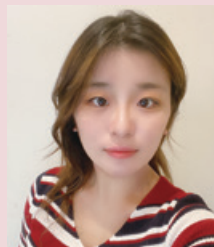
「実践的教養演習」の授業画面
画面上是、さまざまな専攻から集っている担当教員

履修者の声

1

出版部門

「モノ作り」に
惹かれて



佐々木 鞠華

文学部人文社会科学科教育学専攻1年
中央大学附属高校(東京都)出身

この授業のキーワードである「領域横断性」に惹かれ、学部・専攻の垣根を越えてモノを作るという普通の授業形態とは異なる点に興味を湧き、履修を決めました。履修している多くの先輩方と議論したり、ゲストスピーカーのお話を伺ったりすることから、自分に足りない知識や新しいものの見方を学べることを楽しみにしています。

私は3つの「モノ作り」のうち、出版部門を選びました。学生だけでなく一般の方にも読んでもらえるような教科書を作りたい、そのためには常に読者のニーズを意識していきたいと思います。

この授業を通して、ゼロから1冊の本を作り上げるという達成感を得るだけでなく、「企画—準備—実施—調整—完成」という、事業やプロジェクトの一連のノウハウを会得する学びは、今後の学生生活や社会人生活で経験するさまざまな事業・プロジェクトに応用することができると思います。



履修者の声

2

イベント部門

社会で必要になる
自ら考え、
行動する力



近藤 祐日

経済学部国際経済学科3年
Tachibana High School
(ニュージーランド)出身

この授業を履修した理由は、「実践的教養演習」という新しいタイプの演習授業に惹かれたからです。1、2年次で習得した基礎をもとに、参加型の授業を受けたいと思っていました。グローバルな人材が求められる世の中で、消極的な姿勢では何もなし得ることはできないと考え、自分を変えるという目的で履修しました。また、この授業は、他学部の人たちと交流を深めることができるので、同じ知識を持つ人たちと企画を進めることができ、違う分野の知識を持つ人たちと企画を進めることができるのが最大の魅力だと思います。

私がイベント部門を選択した理由は、出版部門や動画制作部門と比べて人の反応を直に感じることができると思ったからです。明確な内容はまだ決めていませんが、私は参加型のイベントを催したいと考えています。自ら体験して楽しめ、共有したくなるということをコンセプトに、これから企画を進めていきたいです。

この実践的な授業を受けていくにあたって、自分の考えをまとめて伝えること、皆と協力して成果を出す協働性、この二つを意識しながら、社会に出るための力を養いたいです。

履修者の声

3

動画制作部門

人の心を動かす
動画制作を
めざして



佐々木 愛夏

文学部人文社会科学科
フランス語文学文化専攻2年
群馬県立太田女子高校出身

高校生のときに広告代理店への企業訪問をしてから、人の心を動かすような映像やモノに興味を抱いていました。また、大学では受け身の学びだけでなく、自発的な学びがしたいと考えていました。この授業では、聞いて学ぶだけでなく、自分自身で本の出版や動画制作といったモノ作りができると知り、受講を決めました。

この部門では、動画制作を行います。中央大学を卒業された映画監督やシナリオライターの方々と講師として招き、動画発信技術を学び、「よりよい動画とは何か」も考えていきます。動画を作るための基礎となる法律や制作工程、企画の立て方を一から学び、人に伝える動画、人に伝わる動画をめざします。皆で積極的に意見を出し合い、個々の考えや思いが反映された動画を作りたいと考えています。

私はこの授業で、主体性を身につけたいと思っています。自分の意見や考えをしっかりと持ち、臆することなく伝え、向上心を常に持って臨みたいのです。動画制作部門の11人全員で、人の心に響く動画が作れるようがんばります。